

人類学博物館紀要 第 26 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 26 号

南山大学人類学博物館

2008

目 次

巻頭言

第一展示室（考古資料展示室）展示アルバム作成メモ

..... 吉田泰幸… 1

博物館における映像資料の可能性

——特別展『フィールドの記憶—生誕 100 年

人類学者沼沢喜市のニューギニア調査写真から—』を振り返って——

..... 木田 歩… 11

映像を作る、写真を見せる

——南山大学人類学博物館 2007 年度特別展「フィールドの記憶」における映像製作の試み——

..... 山崎 剛… 29

友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション・データベース化進捗状況 報告

..... 河邊真次… 35

巻頭言

大学博物館

現在、人類学博物館では、2006年度に文部科学省の私立大学高度化推進事業の一つであるオープンリサーチセンターを立ち上げ、「学術資料の文化資源化に関する研究」というテーマで研究プロジェクトを進めている。こうしたテーマを選んだ理由はただ一つ、近い将来に起こるであろう、人類学博物館のリニューアルのための基盤作りである。その中には、学術資料の専門的な研究を行う4つの部会（考古学・人類学）と、博物館資料の文化資源化を研究する3つの部会（博物館学・情報・歴史）がある。

これらの部会に、学外・学内、大学・行政・企業といった垣根なしに、専門の研究者に参加してもらって、将来的な人類学博物館のあり方を考えているのである。私は、このような研究体制を「梁山泊型」研究プロジェクトと呼んでいる。

ところで、人類学博物館のあり方、というのはきわめて具体的なイメージを創りあげることになるわけだが、そのような具体的なイメージに先行して、どのような博物館を目指すのかという明確なビジョンが必要なことは言うまでもない。これについては、巻頭言で述べることではないし、現在、あれこれと模索している状況である。だが、大学博物館とは何なのか、ということについてはこれまでもずいぶんと考え、あるいは文章にもしてきた。

一言でいえば、大学博物館とは、大学における学内共同利用機関であり、同時に生涯学習機関である。ただし、これは私のオリジナルなアイデアではない。私が以前勤務していた大学博物館の上司の信念であり、私もそれに共鳴しているので、文章で書いたり、口頭でもそう主張しているのである。

この考え方の根本にあるのは、大学博物館は、博物館である以上、他のカテゴリーにある公立・私立の博物館と同じである、という主張である。そしてその一方で、大学博物館には大学博物館の特色があり、その部分を展開していくことで、他の博物館とは違う個性を持ち、差別化を図ることができるのだ、ということでもある。共通性と個性とに二股を掛けて、大学博物館は存在しているのである。

最近、大学博物館とは本質的に、一般の博物館とは異なるという論調を目にすることもある。ここには、何か上から見下ろすような眼差しを感じるのだが、忘れてならないのは、大学博物館は第一義的に、大学と社会とを繋ぐパイプなのだ、ということではないか。もちろん、学術研究の場であり、高等教育の場であることは否定しないが、それだけが仕事ならば、大学博物館が必要だという論拠としてはきわめて弱い。80年代、まだ大学が順調だった頃は、大学は大学博物館の存在を顧みることにはなかった。大学が社会に目を向け始めたとき、大学博物館の存在を再発見したのである。

大学博物館は大学と社会とを繋ぐパイプであるという役割を自覚した上で、その意味するところを考えてみると、一般的には大学の研究成果を広く社会に公開していく、所謂情報発信基地としての役割を想定するであろう。そのこと自体は間違いではない。だが、今後重要な課題となってくることは、今現在、広く社会に蓄積されている様々な知識・経験・情報を集約し、それを学術資料化していくことなのである。そしてその仕事こそ大学博物館が先陣を切っていくべきことである。それが実現できるようになったとき、はじめて博物館と利用者との間に、よく言われるような、インタラクティブな関係が構築できるものと思う。

今、大学博物館はどうあるべきか、と問われたら、何をおいてもそのことを主張したい。

2008年3月
人文学部准教授 黒沢 浩

第一展示室（考古資料展示室）展示アルバム作成メモ

吉田 泰幸

はじめに

本館において、考古資料を展示している第一展示室の展示アルバムを作成することになった。将来的な図録作成のための基礎的作業という位置づけのみならず、資料の貸出しや普及活動等を広く含んだ収蔵資料の活用という観点からも必要な作業と考えられる。展示資料は全収蔵資料の中でもいわゆる「優品」が選択されていることから、その把握は両方の目的に適うものであろう。同様の作業は過去にもおこなわれた形跡があるものの、不調に終わっている。原因は館員が全てテンポラリーな立場にあることだが、長期的にみれば、どの館でもスタッフはテンポラリーとも言える。多少の可塑性ある目録の作成が最終的には求められる。本稿のような備忘録が基礎的な記録の充実に資することがあれば幸いである。

既存の目録

現在のところ、考古資料全体に関する目録は3つ存在する。それらを作成年代が古いものから列挙する。

目録①：遺跡番号がローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ……）で付され、その番号ごとに資料目録やメモがファイリングされたものである。資料目録が英語で作成されていることなどから、グロート神父に続き、マーリンガー神父が主宰していた日本考古学研究

所において作成されたものと考えられる。1951年にグロート神父によって構想されたという「考古学会連合」の規約書（領塚1996）を裏紙として利用したメモが添付されていることもあるので、これらの作成年代もその付近に求められるのではないだろうか。現存する最も古い記録類である。日本考古学研究所から本学の人類学研究所、そして本館へと移管されてきた資料の出土遺跡の比定に際しては、最も優先されるものである。

目録②：「南山大学人類学民族学研究所」作成のカード群である。資料1点につき1枚のカードが使用されることが多く、登録番号の項目に「J-〇〇〇」あるいは「1-〇〇〇」、「2-〇〇〇」（頭の「0」は旧石器資料、「1」は縄文時代資料、「2」は弥生時代資料、以下続く、というルールになっていることがうかがわれた）というルールが異なる2種類の番号が記されている。前者を消して後者が記されていることもある。本学によって発掘調査がなされた遺跡の資料を含んでいる点で、目録①とは内容を異にする。

目録③：バインダーに綴じられた遺物台帳である。目録①・②の統合を、目録②にみられた「1-〇〇〇」、「2-〇〇〇」の登録番号を採用して目指したものであることがうかがわれた。

上記のように、同一資料に最大3つの登

録番号が付されていることもある。そのため、長期間の間に異なるルールをもつ番号同士の対応がいつしか不明になったり、そもそも登録番号をもたない資料も存在するため、出土遺跡等が不明という扱いになっているものが多くあることが、展示アルバム作成の過程であきらかになった。

第一展示室の展示は、キャプション等大変不親切に見えるが、一部の向きには好評である。主に資料の豊富な数量が魅力のようである。その点からも第一展示室資料は研究・教育のみならず、普及活動においても重要な資料と考えられるが、それとは反比例するような状況が続いており、いつしか不明になった出土遺跡の確認・資料内容・点数など、基礎的作業の重要性が増してきている。目録③のような、資料全体の把握という基礎的作業は試みられた形跡はあるものの、その数量の多さが原因か、不十分なまま終わっている。多少の可塑性がある、担当者が変わっても変更がしやすい目録作成が必要となる。そのため作業過程を記しておくことも重要と考えるが、今回は出土地不明、あるいは別地名となっている可能性が高いものについての同定作業について以下に記す。

同定パターン1：文献から

既に刊行されている報告類から、判明したものについて記す。

・保美貝塚出土骨角器：『東海の先史遺跡綜括編』（復刻版である紅村 1984）から『東海の先史遺跡綜括編』（復刻版：271頁）に「南山大学資料」と記されているが、目録②のカードにおいては不明となっていたものが2点みられた。同書掲載の図

面と実物との比較が写真1である。

比較対象とした『東海の先史遺跡綜括編』掲載図中1はキャプションに「角製尖頭器」とあるが、髪飾り、もしくは編針の可能性を考慮すべき資料であろう。長さ17.8、厚さ1.5cm。

同じく4は「弓筈」とある。形態からの用途推定で、弓に付着して出土した事例が現在のところないことから、甲野勇氏の報告にならって「弭形角製品」としておくのが適当であろう。長さ5.4、厚さ1.6cm。

・元刈谷貝塚骨角器：『東海の先史遺跡綜括編』（復刻版である紅村 1984）から資料には「ホビ」と朱書されていたが、『東海の先史遺跡綜括編』（復刻版：178頁）に元刈谷貝塚出土の牙製勾玉とされている資料と、形状・サイズともよく似ることから、元刈谷貝塚出土資料の可能性を考慮すべきものである（写真2）。長さ3.9、厚さ0.7cm。イノシシの上顎犬歯を利用したものである。

・清水貝塚：『人類学博物館報告』第13号（金森 1991）から

金森昭憲氏によって外面口唇部直下に靨痕があると報告されている土器である（金森 1991：6頁、写真3）。口径9.6cm。しかし展示ケース内ではその靨痕がある口縁部が下になるように展示されていた。

・竹並出土貝輪：小川敬養（小川 1890）、木下尚子文献（木下 1996）から

「富士見」と朱書されているが、木下尚子氏により、小川敬養氏によって豊前国仲津郡竹並（現：福岡県行橋市泉区竹並）所在の古墳出土と報告されている貝輪に間違いないと判断されたものである（木下 1996：246頁に詳細が記されている）。写

真4に小川文献に掲載された図との比較を示した。長さ14.1、幅8.2、厚さ1.6cm。内径（腕をとおす部分）の長径7.7、短径5.4cm。同じく「富士見」と朱書されているゴホウラ製貝輪1点、イモガイ製貝輪2点も、竹並出土とみてよい。さらに同じく「富士見」と朱書されている石釧も展示資料中にはみられる。小川氏の報告では竹並所在の古墳からは計5点の貝輪が出土したとある。ゴホウラ・イモガイ製貝輪に石釧もあわせれば5点となるが、石製品を貝製品と誤認したとは考えにくい。石釧については竹並出土の可能性があり、という見解にとどめたい。

同定パターン2：注記と目録①との照合から

日本考古学研究所の頃より収蔵されている資料に関しては、出土遺跡の比定には上記した目録①（写真5）が優先されるものであろう。

・姥山貝塚出土土偶・骨角器

番号の前に「0」が付されていなければ「POTTERY」=土器、「0」がひとつであれば「SPECIAL EARTHENWARE」=直訳すれば特殊陶器—後述するように、姥山貝塚では土偶が相当する。特殊土製品、とすべきであろう—、ふたつであれば「STONE OBJECT」=石器・石製品、みつであれば「BONE OBJECT」=骨製品、よっつであれば「SHELL OBJECT」=貝製品、というルールがあったようであり（写真6）、それは資料への注記の際のルールでもあったようである。

不明となっていたが、注記されている「Ⅱ^D03」（写真7）から千葉県市川市姥山

貝塚出土と判断される土偶がみられた。足部のみ。残存高4.3cm。

また、茨城県中妻貝塚出土とされているが、同じく注記されている「Ⅱ^D01」（写真8）から千葉県市川市姥山貝塚出土と判断される土偶もみられた。足部のみ。残存高9.6cm。

目録②のカードにおいては千葉県香取市向油田貝塚出土となっているが、注記されている「Ⅱ^D00016」等（写真9、一番上の資料の長さ：15.1cm）から、千葉県市川市姥山貝塚出土と判断される骨角器である。7点。

これらの資料は姥山貝塚報告書（グロート・篠遠1952）中にも実測図と写真図版が掲載されており、どういった経緯で出土地不明や、別遺跡出土と捉えられるようになったかは定かではない。資料目録の不備が続けば他の資料でも同様の事態になる可能性は多分にあるため、本稿において記す次第である。

・蝦島貝塚出土耳飾

目録②のカードでは不明となっていたが、注記されている「LXⅣ^A01」（写真10）から岩手県一関市（旧花泉町）蝦島貝塚出土と判断される資料である。日本考古学研究所において作成されたとみられるファイルは遺跡単位で整理されており、同貝塚には「LXⅣ」の番号が割り振られている。ファイル内のメモにも「01耳栓^{じせん}（完）」とあり（写真11）、本資料のことを指していると考えられる。孔を有する土製栓状耳飾で、表面部直径2.1、装着部直径1.4、厚さ1.7cmである。また、番号の前の「0」の数と資料の種類との関係は、姥山貝塚と同様であることがうかがわれ

た。

同定パターン3：目録②・③から

他に参照する資料がなく、目録②と③のみが根拠となっているものが多数あるが、上記したように混乱の末の記述である可能性もある。同定パターン1・2で出土遺跡を把握できるものを増やしていく必要がある。

今後の課題

今後の課題として、ひとつはより一層の精査が必要であることが挙げられる。

もうひとつは、写真中にもあきらかな、シールが糊付けされている問題がある。ヨーロッパの旧石器時代資料であるマーリンガー資料に関して写真撮影の必要からその手のシールを剥がす作業を2007年におこなったが、それらは水溶性の糊で添付されているらしく、水や湯を塗布することで、格段に剥がれやすくなる。キャプショ

ンの充実とともに、資料公開を目的とした写真撮影のためにも、今後必要になる作業と考えられる。

引用文献（編著者名アルファベット順）

- グロート, G. J., 篠遠喜彦. 1952. 姥山貝塚. 日本考古学研究所：市川.
- 金森昭憲. 1991. 愛知県西尾市清水貝塚発掘資料報告. 人類学博物館紀要. 13. 南山大学人類学博物館：名古屋.
- 木下尚子. 1996. 南島貝文化の研究. 法政大学出版局：東京.
- 紅村 弘. 1984. 東海の先史遺跡—綜括編—. 名古屋鉄道株式会社：名古屋.
- 小川敬養. 1890. 豊前国仲津郡発見ノ貝輪. 東京人類学雑誌. 49：200-201.
- 領塚正浩. 1996. ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所—失われた考古学史を求めて—. 鎌ヶ谷市史研究 (9)：35-54.
(南山大学人類学博物館臨時職員)

Compiling a Photographic List of Archaeological Exhibits

YOSHIDA Yasuyuki

The 1st Exhibition Room of the Anthropological Museum of Nanzan University displays a collection of artifacts known to have a high archaeological value. Nevertheless, the Museum is yet to compile a photographic list of these items, apart from several incomplete attempts made in the past. Currently engaged in this task, I have found that some artifacts are incorrectly identified or even left unidentified in existing lists, which were compiled separately and indexed differently. We should resolve such defects and confusion by completing a photographic list of all the items, which would also help them receive the public attention that they deserve.



写真-1 愛知県保美貝塚出土骨角器



写真-2 愛知県元刈谷貝塚出土歯牙製品



写真-3 愛知県清水貝塚出土土器 (右:口唇部拡大)

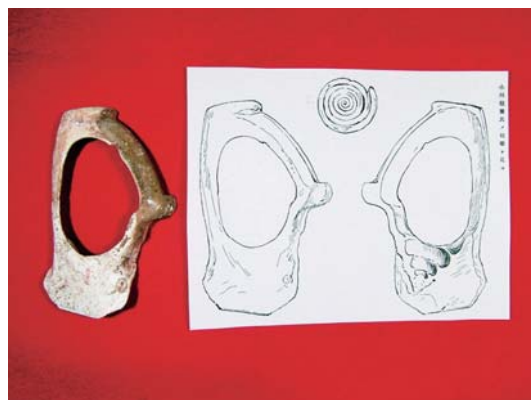


写真-4 福岡県行橋市竹並出土土輪

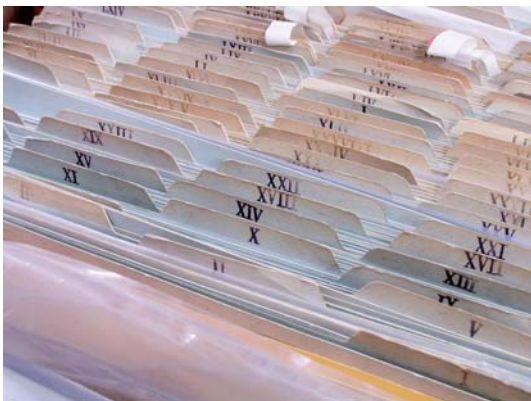


写真-5 日本考古学研究所作成資料目録フォルダ

	CULTURAL R
POTTERY	1 - 2712
SPECIAL EARTHENWARE	01 - 03
STONE OBJECTS	001 - 0046
BONE OBJECTS	0001 - 00024
SHELL OBJECTS	00001 - 00003
WOODEN OBJECTS	
BRONZE & IRON OBJECTS	

写真-6 千葉県姥山貝塚資料目録



写真-7 千葉県姥山貝塚出土土偶1 (右：足裏部の注記)



写真-8 千葉県姥山貝塚出土土偶2 (右：足裏部の注記)



写真-9 千葉県姥山貝塚出土骨角器



写真-10 岩手県蝦島貝塚出土耳飾 (右:注記部拡大)

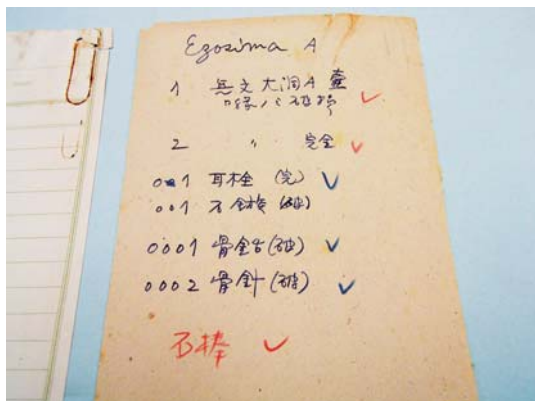


写真-11 岩手県蝦島貝塚資料目録

博物館における映像資料の可能性

——特別展『フィールドの記憶—生誕100年
人類学者沼沢喜市のニューギニア調査写真から—』を振り返って——

木田 歩

はじめに

近年、南山大学人類学博物館にて受贈している資料、特に民族学に関する資料には、カラースライドやモノクロフィルム、8ミリフィルムなどの膨大な映像資料が含まれている。

まずは、1969年から1974年にかけて3次にわたって実施された「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」の収集資料の寄贈を2000年に受けた。その中にはおよそ3万枚の35ミリカラースライドとモノクロネガフィルム、8ミリフィルムが含まれている¹⁾。

つぎに、2005年に受け入れた「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」がある。このコレクションは、1960年代から40年以上にわたり当該地域でフィールドワークを続けた、人類学者である友枝啓泰氏が撮影した4万枚以上のスライド、ポジ・ネガフィルムといった写真が基礎となっている²⁾。

さらに、2006年には、本学名誉教授早川正一氏から、1964年に南山大学が組織した「東ニューギニア学術調査団」にて収集した資料を寄贈していただき、その中に調査団員が撮影した写真や8ミリ・16ミリフィルム等が含まれている³⁾。

これら寄贈された映像資料は、撮影された時期や地域、被写体等それぞれ異なるも

の、いくつかの特徴を共有している。まずは、写真家や映像作家ではなく、人類学や民族学の学術調査に携わる研究者が撮影したものである。そして、家族との記念や商業用、芸術表現としてではなく、フィールドワークの過程で、調査の記録を目的として撮影された映像である。加えて、撮影された映像の多くは、写真集や写真展、映像作品として、あるいは、ベイトソンとミードのように、映像による実験的民族誌として公開されたのではなく、むしろ、テキストを補足するイラストレーションとして扱われてきた。

こうした特徴を有する資料の整理や調査から、映像資料を対象に、人類学は何を考へ、どういった問題を示すことができるのだろうか。また、博物館はどういったメッセージを伝えることができるのだろうか。当館にとって新たな課題と向き合う機会もたらされた。

たとえば、「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」のデータベース構築をすでに進めている加藤・河邊 [2006] は、画像に関する研究方法として、①被写体つまり「撮影される側」の研究、②撮影者自身はあまり意識していなかったかもしれないが、「撮影する側」の研究、③画像が当事者以外に対しても公開されるならば、画像と対峙する第三者に関する研究、以上

の3つを挙げ、本館のみならず館外のさまざまな専門家に画像データを提供することで、研究が深化していくことを目指している。

また、山崎 [2007] は、先述したニューギニア映像資料の調査観察を通して、博物館で所蔵する映像資料を、研究のために見る資料として利用するだけでなく、誰かに説明し見せるための資料として利用する必要性を示した。

このような状況を背景に、当館所蔵の映像資料、特に写真を展示資料の中心に、人類学の研究と博物館での展示実践を試みるために、2007年9月28日から11月24日まで、当館にて特別展『フィールドの記憶—生誕100年人類学者沼沢喜市のニューギニア調査写真から—』を開催した。そこで、本稿では、本展開催の経緯や展示資料を紹介しながら、博物館での映像資料の可能性について考察してみたい。

文化を見せる、学問を見せる

既述の通り、当館所蔵の映像資料の多くは、本来、人類学や民族学の調査研究活動の一環として撮影された。つまり、調査対象である諸民族の文化や社会に関するさまざまな情報を、視覚的に記録することを意図した映像である。そして、当館への寄贈後も、こうした文脈を継承しながら、文章を補うイラストレーションとして、当館紀要の紙面上にいくつかの映像資料が掲載されてきた⁴⁾。しかし、多様な民族の文化に対する理解を促す資料としてではない映像資料の利用が、館外の研究プロジェクトに参加することで今年度実現した。

筆者を含め当館に勤務するスタッフは、

2006年度より、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005（研究プロジェクト4-2）』にプロジェクトメンバーとして参加している。2003年度より進められているこのプロジェクトは、アジア大陸部の、特に、ラオス、タイ、中国雲南省を中心とする地域において、人々の生業、健康と栄養、資源の管理と保全について調査を行い、第2次大戦後から現在に至る当該地域の生態史を明らかにすることを目的としている。その課題の一つが、国内の諸機関に所蔵されている日本人の収集したモノや情報の所在確認調査を行い、最終的にデータベースを作成することである。そして、本プロジェクトにて、当館所蔵の「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」が撮影した35ミリカラースライドのデジタル化を行った。プロジェクト最終年度を迎えた今年、研究成果の一端を公開するために、『モチゴメの国ラオス—メコン河流域の暮らし—』と題した企画展を、天理大学附属天理参考館にて開催した⁵⁾。この企画展では、デジタル化された当館所蔵の2点の画像を含めて、日本の学術調査団による調査史を物語る資料として新たな意味を付与された、いくつかの調査団の写真パネルが展示公開された。

当該地域の研究が形成される道筋を、展示資料を通じて具体的に検証して見せることができたとは言いがたい。しかし、本研究プロジェクトの調査や展示を経験することで、筆者は、映像資料とは多義性を秘めた資料であることを痛感した。だからこそ、たとえ調査の補助的役割を担うために誕生した資料であったとしても、新たな文

脈に位置づけることで、博物館に所蔵されている他の資料と同様に、主要な展示資料にもなりうるのである。

そこで、当館所蔵の映像資料から、人類学博物館で考察するに適したテーマを設定し、展示を行うこととなった。

映像を撮る、映像を見る

近年の寄贈資料の整理や調査は、所蔵資料の見直しにつながり、結果的に新たな所蔵資料が判明した。その一つが、当館の通称名「沼澤記念博物館」の由来となっている沼澤喜市先生が、フィールドワークで撮影した写真群である。神言会員として最初の日本人司祭であり、本学の第2代学長であり、神話や宗教をテーマに研究を行った人類学者であった沼澤先生（図-1）は、1966年の7月から10月までの約4ヶ月、単身ニューギニアを訪れ、シュラダー高地で人類学的調査を行った。そして、この調査で撮影された60本710コマのプロローニー版（6センチ×6センチ）モノクロネガフィルムとコンタクトシートが、当館に所蔵されていることが確認できた。

この写真を一枚一枚眺めてみると、身体技法がわかるような時系列的な連続写真はほとんどなく、また固定的なポーズを強いているわけでもない。百科事典的な網羅的・総合的な写真でもない。また、沼澤先生がインフォーマントの生活空間に入り込み、動き回っているようにも感じられない。人物と家屋を中心とした、非常に断片的な記録であることがうかがえる。調査目的を掲げた人類学者の撮影した写真としては、少し物足りない印象を受ける。しかし、これらの写真を包括的に眺めた時、人

類学者がフィールドワークで経験する、インフォーマントとの関係性を映し出している資料として捉えることができるのではないかと感じた。そして、生誕100年を記念し、沼澤先生が撮影し当館に所蔵されていた本資料をもとに、特別展を企画することにした。

当館は、「人類学博物館」であり、一つの学問領域をその根幹としている。よって、人間の文化や社会の多様性とともな普遍性を探求し、その研究成果を公開することは、当館の社会的役割の一つである。しかし、この学問について年齢や国籍を問わず、不特定多数の市民へ学びの場を提供することも、当館の存在意義の一つであろう。人類学にとってフィールドワークは不可欠な営為と言われる。しかし、そのあり方を説明することは容易なことではない。この学問を支えているフィールドワークとは何か、フィールドワークという経験とは何かを視覚的に示すことは、人類学とはどのような学問であるのかを物語ることに他ならない。

加えて、写真を撮影した人物は展示を行う人物と異なり、また、展示のコンセプトが事前にあって、それに合わせて写真撮影を行ったわけではない。そこで、写真を撮る、ということに関する視点よりも、写真を見ること、また、「見ること」を「見る」楽しみとは何かを伝えることに焦点を絞った。

確かに、沼澤先生の撮影した写真には、物理的に使用できない写真や、交わった人たちとの記念として撮影された写真も含まれ、そうした写真はほぼ公開されなかった。しかし、フィールドワークを終え、そ

の成果を伝えるために、現地で書き記した日誌を読み直し、撮影した写真を整理し、どれが紹介するにふさわしいかを選択する。沼沢先生は、この営みを繰り返しながら、おそらく撮影した時間よりも、また、フィールドワークに費やした時間よりも長い時間を掛けて、写真やフィールドノートを通して、フィールドを追体験したことが想像できた。そのために、この60本のフィルムは、フォルダにそれぞれ番号が記され、丁寧な整理が加えられていたのである（表-1）。

そこで、特別展では、撮影者にとってはおそらく失敗と判断したであろう映像も含めて、全体像を示すために、まずは710コマのフィルムを画像データとしてデジタル化し、一枚一枚の詳細な内容を観察することは困難だが、全体像をできる限り一目で見渡せるように、B0サイズ（1030ミリ×1456ミリ）のパネル4枚に編集し、展示資料とした（図-2～5）。

沼沢喜市先生のニューギニア調査と映像資料

ところで、沼沢先生は、なぜニューギニアをフィールドワークの地として選んだのだろうか。ここでは調査後の1969年に刊行された『ニューギニア・ピグミー探検』をもとに、調査の目的について簡単に触れておこう。

文部省から海外学術調査のための科学研究費の交付を受けて行われた「東ニューギニア学術調査団」の団長として、沼沢先生は1964年に2ヶ月ほど東ニューギニアに滞在し、8月にシュラーダー高地に入る玄関の1つであるシンバイを訪れた。そ

の時、ピグミーと初めて出会い、好感を持った。そして、日本に戻っても、シュラーダー高地の自然とそこに住む民族に対して、一種の「原始への郷愁」を感じ、1966年にはただこの民族だけを調査するために、単身、東ニューギニアへ渡った [ibid. : 9-12]（表-2）。この調査の目的は、当時まだこの地域で実施されていなかった人類学的調査をもとに、シュラーダー高地人のニューギニアにおける民族学的位置づけを行うことであったという [ibid. : 350]。

この調査で、どれだけの種類のカメラとフィルムを持ち込んだのか、現在では確かめることは難しい⁶⁾。しかし、少なくともカメラを3機携えていたようである [ibid. : 122]。他にも8ミリカメラ [ibid. : 189] や、聞き取りを録音するためのテープレコーダーを持参されていたようであるが、これら機材や記録媒体は、60本のモノクロフィルム以外、現在のところ発見できていない。そして、調査で撮影した写真は、『ニューギニア・ピグミー探検』や論文 [沼沢 1971] のなかで、挿絵としてその一部が掲載されている。

なお、すでにクネヒト [1998] が報告しているように⁷⁾、1966年のニューギニア調査のフィールド日誌や、準備備品等が記載されたノート、さらに『ニューギニア・ピグミー探検』の手書きの初稿は、本学人類学研究所に未整理の状態で収蔵されている。そして、今回の特別展では、本研究所のご協力を得て、調査日誌9冊を展示した。

ワークショップ『人類学は映像をどのように語るができるのか』

展示資料である沼沢先生の撮影した映像資料を含め、近年受贈している映像資料は、当館が直接研究調査活動に関与した資料ではない。また、それぞれの調査対象地域の専門家が当館にはいない。多くの研究者の協力のもと、多角的な視点で研究が行われることは、新たな研究や課題の発見へと繋がる。

そこで、本展の関連事業として、本学地域研究センター共同研究『映画の多元的解釈のための基礎研究』と共催で、ワークショップ『人類学は映像をどのように語るができるのか—南山大学人類学博物館特別展「フィールドの記憶」を通して—』を、11月23日に開催した。このワークショップでは、人類学と映像学を専門とする4名の研究者をコメンテーターとして招いた。そして、展示資料を対象に、それぞれの視点からコメントや問題提起をしていただき、アカデミックな問いを派生させることで、映像からどのような人類学の問題を提示することが可能なのか、そうした研究へのきっかけ作りとなることを目指した。

およそ30年にわたり、パプア・ニューギニアにてフィールドワークを行っている神戸市看護大学の紙村徹先生からは、現在の現地の状況と比較しながら、展示資料である沼沢先生の写真の内容について、疑問点も含めて具体的なコメントをいただいた。また、本学の加藤隆浩先生からは、写真を通して、被写体との関係性や関心等見えてくるもの、見えてしまうものについて、コメントしていただいた。次に本学の

坂井信三先生からは、撮影者が映像に何を見ていたのかを、仏領西アフリカの1850年代から1950年代までの探検記や民族誌に掲載された挿絵や写真を事例に、お話していただいた。最後に名古屋大学の茂登山清文先生に、現代アートのなかのポートレート写真の変遷について、ご紹介いただいた。

以上のように、館員だけでは気付かなかった疑問点や、映像一般を対象とする様々なアプローチからの問題意識をコメンテーターから提示していただけた。特に、茂登山先生に現代アートのポートレート写真をご紹介いただくことで、人類学的調査や研究にて撮影され集積されてきた映像そのものや映像メディアの利用方法が、非常に特異なものであることが、あらためて浮き彫りにされたと思われる。港 [1999] が指摘するように、おおよそ映像人類学というと、写真や動画を利用した「映像による」人類学をイメージすることが多い。しかし、記録のためであれ、コミュニケーションのためであれ、映像を創り出し、消費し、再加工する、こうした映像を経験する人類について探求する、「映像の」人類学はまだ新しい研究領域であり、十分な考察が行われているとは言いがたい。コメンテーターの発言や、ワークショップ参加者の質問から、映像の捉えどころのない奥深さを実感することができた。

博物館における映像資料の可能性

特別展やワークショップの開催を通じ、映像資料の可能性、特に博物館における映像資料の可能性について考察したことを、いくつか述べておきたい。

まずは、映像資料の特徴について記しておく。その最大の特徴は、可変性であろう。今回、本展を想定した映像のデジタル化やトリミング、色補正等の加工を施した。こうして、映像が誕生した文脈とは異なる世界を創出することができることを確認した。映像資料とは非常に柔軟であり、時に何かを付け加えたり、差し引いたりすることで、果てしなく変化し続けることができるのである。

もう一つは、映像は一義的ではない、ということである。人類学や民族学の研究者は、記録のために撮影機材を調査に携え、利用してきた。こうして撮影された映像は、“人類学的”あるいは“民族学的”な研究資料として生成されたことは言うまでもない。しかし、それらをその文脈だけに閉じこめてしまうのでは、一次的な利用のみで終わってしまう。映像資料の再活用を企図し、それらの価値を見出すためにも、多角的な視点で資料を観察することが必要なのである。

新たな資料を受け入れたことが、蓄積されていた所蔵資料の再検討に繋がり、展示として公開・発信され、結果的に新たな問題意識を生み出した。そもそも資料には多面的な情報が内在されており、すでに保存されている資料にも、学術的価値のみならず、様々な価値を付与することができるのである。だからこそ、将来的展望を見据え、組織的に資料を収集し、体系的に分類整理し、恒久的に保存し、新たな利用にも対応できるように管理し、その成果を社会に発信することが、博物館の重要な役割なのである。

博物館は、年齢や国籍を問わない来館者

との、言葉を介さない、あるいは言葉を越えたコミュニケーションが発生する場である。そして、「見ること」「見せること」でメッセージを伝える、実験的实践の場である。博物館において、映像資料を駆使しながら展示を行うことは、実は「見る」こととはなにか、その問いへの探求に繋がるのではないだろうか。当館では、現在、展示空間に写真やグラフィックを積極的に使用していない。今後は、映像資料のようなヴィジュアル資料の可能性をさらに考察しながら、できる限り活用していきたい。

おわりに

第2次の調査を終え、その成果をまとめた「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」の団員の一人である中塚氏は、次の言葉でその報告を締めくくっている。

「標本資料、フィルム資料も、破損の速い文献複写資料と共に、今後の調査において出来る限り収集に努め、本研究の総合的目標に資せしめるべく努力しなければならない。また、これらの資料はその性格から実地調査終了後が重要である点、広い意味での学術調査の問題として今後検討されて然るべきである。」[中塚 1972：90]。

未来を想定し、すでに30年以上も前に投げかけられた問いに対して、われわれはどれくらい思考を巡らせたのであろうか。そして、日々資料と対峙しながら、どのような未来を想像し、新たな問いを投げかけているのであろうか。

膨大な量の映像資料を溜め込むことが、

寄贈を受け入れた目的ではない。そうした資料を集め、丁寧な観察を繰り返し、時には編集や加工を重ねながら、どのような意味を導き、何を伝えることができるのか。この特別展の開催をきっかけに、展示という形態だけでなく、その他の公開方法も模索しながら、映像資料を人類学の資料として、博物館の資料として位置づけていくことの重要性に気づかされた。そうした実践をクリエイティブかつクリティカルに続けていくことが、今後の課題である。

註

- 1) 南山大学人類学博物館所蔵「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクション受贈の経緯については重松 [2004]、コレクションの全体的な内容については木田 [2007a]、本コレクションの写真資料については山崎 [2006]・木田 [2007b] をそれぞれ参照のこと。
- 2) 当館所蔵「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」の詳細は、加藤・河邊 [2006] を参照。また、このコレクションについては、現在、文部科学省の科学研究費補助金（研究成果公開促進費、課題番号：No.188045、代表者：加藤隆浩）を受け、画像データベースを構築しており [河邊 2007]、その一部は当館 HP 上でも閲覧可能である。
- 3) 本資料の詳細については、山崎 [2007] を参照。なお、本稿中、独立前の「東ニューギニア」という国名を資料に従って使用する。
- 4) たとえば、後藤は当館にて展示さ

れている西北タイの民族資料について、映像資料を交えて紹介し [2004、2005、2006]、久慈はラワ族の土器作りの製作過程を調査団の撮影した写真を利用しながら紹介した [2005]。また、河邊は、デジタル化された友枝コレクションを事例に、画像データベースの学術的活用を試みた [2007]。

- 5) 本プロジェクトの詳細については、秋道・久保・田口 [2004] を参照。また、企画展については、図録を参照。なお、本プロジェクトにて、「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」撮影の 35 ミリカラーライドの、12,763 件の項目情報と 11,018 点の写真がデジタル化された。
- 6) 『ニューギニア・ピグミー探検』には、沼沢先生撮影と記されたカラーフィルムの写真が数枚掲載されている。よって、モノクロフィルムのみならず、カラーフィルムも現地へ持ち込んだと考えられる。
- 7) 沼沢先生の単独調査のみならず、南山大学の「東ニューギニア学術調査団」とそれぞれの調査目的や成果についてまとめられている [クネヒト 1998]。

参考文献

秋道智彌・久保正敏・田口理恵 2004 「アジア・熱帯モンスーン地域における生態史のなかのモノと情報—時空間軸をベースとするマルチメディア・生態誌アーカイブズの構築を目指して—」『総合地球環境学研究所 研究プロジェクト 4-2 2003 年度報告書』 259-279。

- 後藤真里 2004 「ヤオ族の暮らし（1960年代後半～70年代）—上智大学より移管された西北タイ歴史・文化調査団資料より—」『南山大学人類学博物館紀要』22：11-16。
- 後藤真里 2005 「タイ西北部山地に暮らす人々—上智大学から移管された西北タイ歴史・文化調査団資料より②—」『南山大学人類学博物館紀要』23：14-39。
- 後藤真里 2006 「タイ西北部山地に暮らす人々—上智大学から移管された西北タイ歴史・文化調査団資料より③—」『南山大学人類学博物館紀要』24：1-18。
- 加藤隆浩・河邊真次 2006 「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」『南山大学人類学博物館紀要』24：31-60。
- 河邊真次 2007 「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション・データベース化の意義と学術的利用の可能性—アンデス民衆芸術「サルワの板絵」のモチーフとの比較研究をてがかりとして—」『南山大学人類学博物館紀要』25：29-53。
- 木田歩 2007a 「「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクション—調査団の研究目的を中心に—」『南山大学人類学博物館紀要』25：55-71。
- 木田歩 2007b 「モノグラフ 選ばれた写真」『月刊みんぱく』31（8）：8-9。
- クネヒト・ペトロ 1998 「南山大学による「東ニューギニア学術調査団」の行動と成果の回顧」『アカデミア 人文・社会科学編』67：83-108。
- 久慈大介 2005 「叩き技法を用いた土器作り—西北タイ Lawa 族の土器作り資料の紹介を通して—」『南山大学人類学博物館紀要』23：41-64。
- 港千尋 1999 「映像の自然」『映像人類学の冒険』伊藤俊治・港千尋（編）、せりか書房：10-20。
- 中塚発夫 1972 「第二次上智大学西北タイ歴史文化調査団の成果—略報—」『上智史学』17：83-91。
- 沼沢喜市 1969 『ニューギニア・ピグミー探検』大陸書房。
- 沼沢喜市 1971 「東ニューギニア・シュラダー高地に住むコボン族の物語」『W・シュミット生誕100年記念論文集』南山大学人類学研究所（編）、中日新聞社：21-42。
- 重松和男 2004 「上智大学からの移管の経緯と資料内容」『南山大学人類学博物館紀要』22：14-15。
- 総合地球環境学研究所研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005」モノと情報班（編）2007 『第56回企画展図録「モチゴメの国ラオス—メコン河流域の暮らし—』天理大学出版部、総合地球環境学研究所。
- 山崎剛 2006 「南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史・文化調査団コレクション 写真資料」『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史における統合的研究：1945-2005 2005年度報告書』435-439。
- 山崎剛 2007 「人類学のための映像資料、博物館のための映像資料—2006年度ニューギニア資料整理作業の報告と課題—」『南山大学人類学博物館紀要』25：73-86。
- （南山大学人類学博物館特別嘱託職員）

表-1 南山大学人類学博物館所蔵 沼沢喜市先生撮影 東ニューギニア調査
ブローニー版 (6センチ×6センチ) モノクロネガフィルム一覧

フィルムNo.	撮影年月日	撮影場所	コンタクトシート	コマ数	トリミング
1	1966年7月21日	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
2	1966年7月22日	④ Typen von Arapan	あり	12	コンタクトシートにあり
3	1966年7月24日	⑤ Arapan	あり (1～6コマのみ)	12	1～6はコンタクトシートに、7～12はフィルムホルダーにあり
4	1966年7月25日	7/25 ⑥ Arapan	あり	12	コンタクトシートにあり
5	7月27日	なし	なし	12	フィルムホルダーにあり
6	1966年7月28日	Wurmur	あり	12	コンタクトシートにあり
7	1966年7月31日	Wurmur	あり	12	コンタクトシートにあり
8	8月1日	Wurmur-Arenamp	あり	12	コンタクトシートにあり
9	41年8月16・18日	Wulamer N. G	あり	12	コンタクトシートにあり
10	41年8月16・18日	Wulamer N. G	あり	12	コンタクトシートにあり
11	41年8月18日	なし	なし	12	なし
12	41年8月23日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
13	41年8月24日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
14	41年8月25日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
15	41年8月26日	なし	なし	12	12番目のフィルムフォルダーにのみあり
16	41年8月27日	ルルアイ家	あり	12	コンタクトシートにあり
17	41年8月27日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
18	41年8月28日	なし	あり	8	コンタクトシートにあり
19	41年8月29日	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
20	41年8月29日	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
21	1966・41年9月3日	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
22	41年9月3日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
23	40年9月5日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
24	41年9月6日	S	あり	8	なし
25	9月7日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
26	41年9月9日	Salanp	あり	12	コンタクトシートにあり
27	41年9月9日	Salanp	あり	12	コンタクトシートにあり
28	41年9月11日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
29	41年9月11日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり

30	41年9月12日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
31	41年9月13日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
32	41年9月14日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
33	41年9月16日	Songuvak	あり	11	コンタクトシートにあり
34	41年9月17日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
35	41年9月18日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
36	41年9月19日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
37	1966年9月20日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
38	1966年9月22日	Songuvak (Ainonk)	あり	12	コンタクトシートにあり
39	1966年9月25日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
40	1966年9月26日	Songuvak	なし	12	なし
41	1966年9月29日	Songuvak	あり	12	コンタクトシートにあり
42	1966年10月1日	Bilumfirap	あり	12	コンタクトシートにあり
43	1966年10月1日	Bilumfirap	あり	12	コンタクトシートにあり
44	1966年10月2日	Bilumfirap	あり	12	コンタクトシートにあり
45	1966年10月3日	Bilumfirap	あり	12	コンタクトシートにあり
46	1966年10月3日	Bilumfirap	あり	12	コンタクトシートにあり
47	1966年10月4日	Bilumfirap	あり	12	コンタクトシートにあり
48	1966年10月6日	Bilumfirap	あり	12	コンタクトシートにあり
49	1966年10月6日	Bilumfirap	あり	12	コンタクトシートにあり
50	1966年10月8日	Warabum	あり	12	コンタクトシートにあり
51	1966年10月8日	Warabau	あり	12	コンタクトシートにあり
52	1966年10月9日	Warabau	あり	11	コンタクトシートにあり
53	1966年10月10日	Warabum	あり	12	コンタクトシートにあり
54	なし	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
55	1966年■	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
56	なし	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
57	なし	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
58	なし	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
59	なし	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
60	なし	なし	あり	12	コンタクトシートにあり
				合計 710	

表-2 沼沢喜市先生 1966年東ニューギニア調査 主要行程表一覧

日付	訪問先	引用章
7月8日	ポート・モレスビーの飛行場へ着く。乗り継ぎマダンに到着。ワギ地方のクップのポーレン神父のもとへ。	第2章
7月9日	ポーレン神父とシュラーダー高地における調査計画の打ち合わせ。その後シスターとミンゲンディへ。	第2章
7月10日	ガマールへ	第2章
7月11日	シスターの経営する学校を見学	第2章
7月15日	パイロットのホフ神父が、ポーレン神父とアンドレアスと私を飛行機で迎えにくる。マダンへ。	第2章
7月16日以降	マダンで組立式のテーブル1つ、丈夫な椅子2つ、その他食器、ランプ、食料品など、また土地の人々にあげるための鉄斧、鉞、小刀、赤や青の布地などを買い入れた。	第2章
7月19日	マダンの地方長官へ挨拶と援助のお願い	第2章
7月20日	マダンからシンバイへ。15人のポーターを連れてシンバイからアラパンへ。	第2章
7月26日	アラパンからカイロン、ウォモク、ビルムフィラプ。35人ばかりのポーター。	第2章
7月27日	ビルムフィラプからブルム山、ウルムルへ	第2章
8月1日	1週間滞在したウルムルからアレナムプに	第3章
8月2日	アレナムプからビルムフィラプを素通りしてウォモクへ。ウォモクからサレンプへ。	第3章
8月5日	8時間半ほど歩いてゲブローへ	第3章
8月19日	ゲブローからサレンプ、ソングワクへ。キアブがパトロールで使用する家に滞在。	第3章
8月29日	ソングワクを出発しフンゴイへ	第4章
8月30日	フンゴイを出発しシンバイへ	第4章
9月16日	ソングワクにて	第7章
9月21日	ソングワクにてキアブが数人の巡査とドクター・ボーイを連れて人口登録をおこなう。コボン族の間で石斧や弓矢を集める (p250)。	第7章
9月28日	これまでにソングワクとワラブンで46の物語を蒐集	第7章
9月30日	6週間ほど滞在したソングワクを引き上げて、ワラブンに移る日	第6章
10月18日	約三週間滞在したビルムフィラプを出発。20人あまりのポーターが一緒。シンバイへ。	第11章
10月19日	シンバイの飛行場からマダンへ	第11章
10月23日	アレキシスハーフェンのチャウダー神父と一緒に、50分ばかり歩いてカナナムという部落を訪れる。	第11章
10月24日	哲学教授のシーザー神父とともにムギール、メギアル、ミラプへ	第11章
10月30日	リボという部落へ	第11章
10月31日	マダンを出発しシドニーへ、一泊し帰国	第11章

『ニューギニア・ピグミー探検』より

**Potential of Visual Materials at Museums:
Reflections on ‘Memories of the Field: Kiichi Numazawa and His
Ethnographic Photographs of New Guinea’**

KIDA Ayumi

The recent acquisitions of our museum include a large number of visual materials, specifically films and photographs taken during ethnographic fieldwork. As part of our effort to make the most of these materials, we held an exhibition in commemoration of Kiichi Numazawa, an anthropologist and priest, who acted as the second President of Nanzan University. The exhibition featured, along with his fieldnotes, a collection of photographs that he took during 4 months of fieldwork in Eastern New Guinea back in 1966. We also organized a workshop to complement the exhibition, highlighting the relationship between anthropology and visual materials. These events have led us to recognize that visuals are highly flexible materials that can be modified, detached from original contexts, and endowed with new meanings. It is the task of museums to deliberate over the messages conveyed through such materials, helping them to realize their full potential.



南山大学人類学研究所 沼沢記念文庫所蔵 非公開資料

沼沢 喜市
NUMAZAWA Kiichi
(1907-1980)

图-1 沼沢喜市先生写真



図-2 展示パネル 01

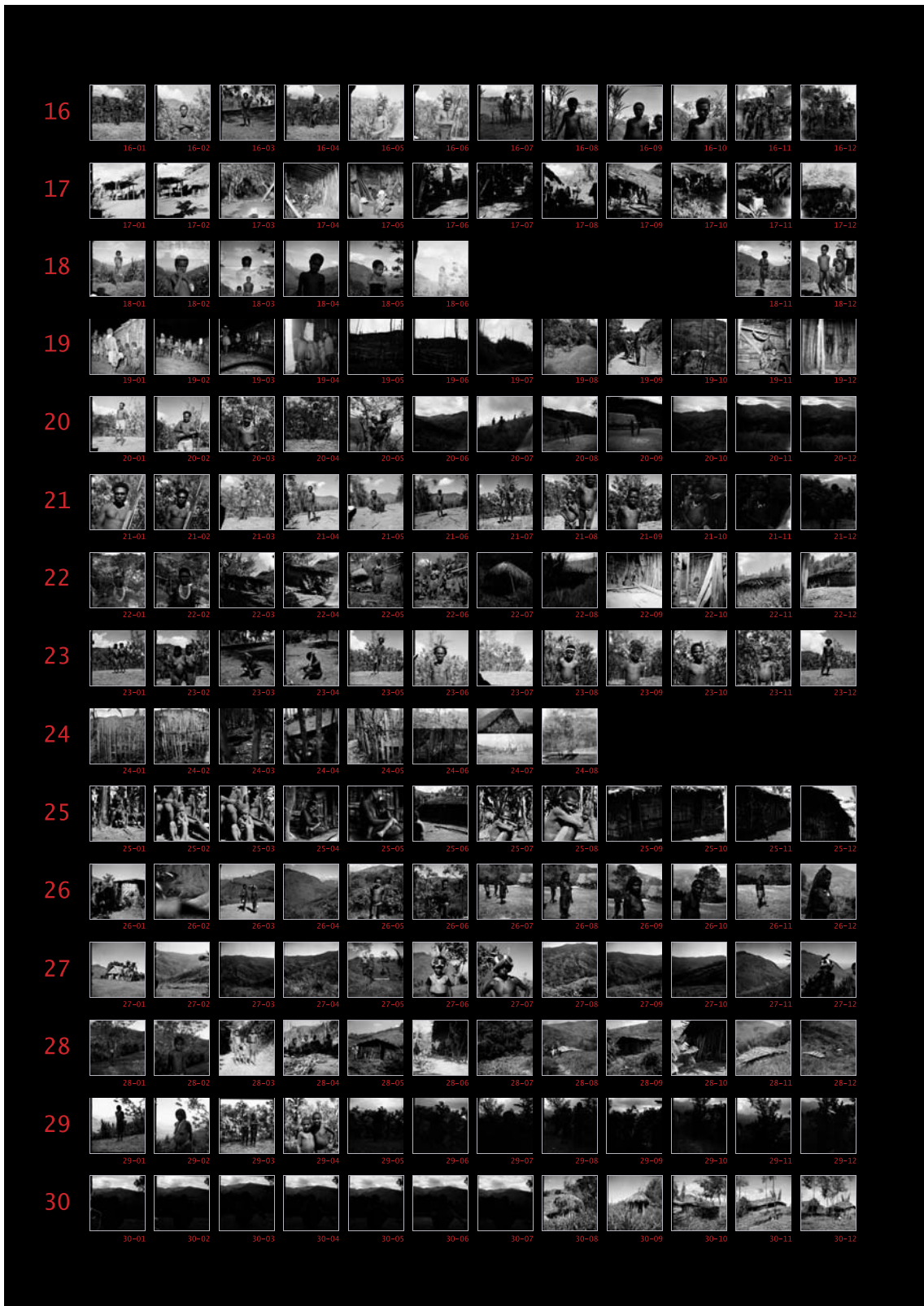


図-3 展示パネル 02



図-4 展示パネル 03



図-5 展示パネル 04

南山大学人類学博物館

特別展
フィールドの記憶
生誕 100年 人類学者沼沢喜市の
ニューギニア調査写真から

9.28(Fri)-11.24(Sat)

南山大学人類学博物館では、近年、人類学者がフィールドワークで撮影した写真や8ミリフィルムといった映像資料の寄贈を受け入れてきました。これら人類学の研究資料としてどのように位置づけることができるのか、本館にとって新たな課題の一つとなっています。こうした問いへの試みとして、今回は本館の通称名「沼沢記念博物館」の由来にもなっている、沼沢喜市先生の撮影した写真を中心に特別展を開催します。

沼沢先生は、神言会員として最初の日本人司祭であり、本学第2代学長(1957-1972)でもあり、そして、神話や宗教をテーマに研究をおこなった優れた人類学者でもありました。本展では、沼沢先生の生誕100年を記念し、本館所蔵資料の中から、もともと事によつてめられていたニューギニア調査写真を紹介します。沼沢先生は、1966年、人種学的調査のため単身ニューギニアを訪れ、約4ヶ月間シュラダー-高山地帯で生活されました。その調査で撮影された60本710コマのモノクロネガフィルムとコンタクトシートが本館に所蔵されていることが明らかとなりました。その一部はすでに『ニューギニア・ピグミー探検』(大陸書房・1969年)に掲載されていますが、本展では残されている写真の全体像を示すことを目指しました。

報酬の引き換えであり、東の間の出会いの証であり、写真には、カメラをもった人間とその前に立つ被写体との間に存在する、非常に複雑な関係性が刻まれているのではないのでしょうか。一人の人類学者がフィールドで撮影した写真をとおして、フィールドという経験とは何か、それらをあらためて思考する機会となれば幸いです。

南山大学人類学博物館

入館料：無料
開館時間：月～土 10：00-16：30
休館日：日・祝 大学の専務休日

〒466-8673 名古屋市千種区山里町18
Tel：052-832-3111 (代表)
http://www.nanzan-u.ac.jp/MUSEUM/

アクセス：地下鉄名城線「八事日赤」駅1番出口より徒歩約10分
地下鉄名城線「名古屋大学」駅1番出口より徒歩約10分
地下鉄鶴舞線「いりなか」駅1番出口より徒歩20分



図-6 展示記録写真

映像を作る、写真を見せる

南山大学人類学博物館 2007年度特別展「フィールドの記憶」における映像製作の試み

山崎 剛

特別展

フィールドの記憶

生誕100年 人類学者沼沢喜市の
ニューギニア調査写真から

9.28(Fri)-11.24(Sat)

映像を作る、写真を見せる

南山大学人類学博物館 2007年度特別展「フィールドの記憶」における映像製作の試み

はじめに

博物館のスタッフになって仕事をするには、まずそこにある資料のひとつひとつの収蔵状況を確認しながら、それぞれの資料が持つおもしろさを発見してゆくことだと言えるでしょう。私も、2006年に当館の臨時職員として仕事をさせて頂いていた時、収蔵庫の奥にこもって沼沢先生が撮られた写真資料の所在を確認し、その一枚一枚を見ながら、これらの資料が、当時のニューギニアのことや、沼沢先生がおこなわれた調査の様子など、様々なことを知ることのできる貴重な資料であると感じ、興奮したのを憶えています。

ずっと前から博物館に保管してありながら、なかなか陽の目をみることのなかった資料が、展示・公開され、多くの人に興味をもって見てもらえることは、博物館にとっても、博物館を利用する人にとっても、もちろん資料にとっても幸福なことと言えるでしょう。

今年度、本学学長であった沼沢先生の生誕100年を記念し、特別展としておこなわれた「フィールドの記憶 人類学者沼沢喜市のニューギニア調査写真から」は、そうした博物館に眠る興味深い資料のお披露目の機会として意味のあるものだったと思います。

ここでは特別展の実行にあたり、企画段階でのアイデア出しから、映像作品の製作などまで振り返り、展示をおこなうことを通して知ることができたいくつかのことを報告することになります。



ひとびと (1分50秒)

沼沢先生が撮られた写真資料を見て、まず気づかされたのは、現地の人々を映した写真が多いことです。きっと、現地の人々の姿は、沼沢先生にとって、どうしても写真におさめたかったもののひとつだったのではないのでしょうか。

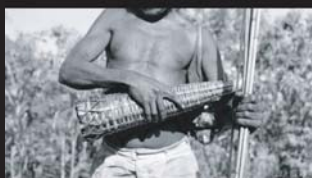
この映像作品では、そんな沼沢先生の調査に想いをめぐらせながら、一人一人の人々との出会いを演出するように画面分割などの効果を使い、実験的な編集を試みました。

企画をたてる

今回の展示に関して、私は元職員の立場で非公式ではありませんでしたが、企画立案の支援にかかわることができました。打ち合わせの過程では、展示における中心的な柱として2つのことを考えました。まず、ひとつは写真資料の全体を見せること。よく撮れている写真だけを見せるのではなく、それらがまとまりのある資料(群)であるという特徴を提示し、博物館資料としての写真資料というものを紹介し、知ってもらうことを目指しました。それは60本710コマの写真すべてをデジタル化し、実寸の6cm×6cmに編集し、B0版の4枚のパネルに出力して展示することで、うまく表現されたと思います。



そして、もうひとつ展示企画の柱として考えたのは、提示・紹介を試みた資料について、さらに興味を持つような仕掛けを設置することでした。その実現のために、沼沢先生の調査のことや写真のこと、ニューギニアのことをできるかぎり研究したうえで、写真を選択し、加工して、映像作品として作製することを試みました。ここで紹介している「ひとびと」と「顕微鏡的・鑑賞」という2つの映像作品は、今回の展示企画をきっかけに、博物館という場所でおこなった調査・研究の成果であると言えます。



顕微鏡的・鑑賞 (12分05秒)

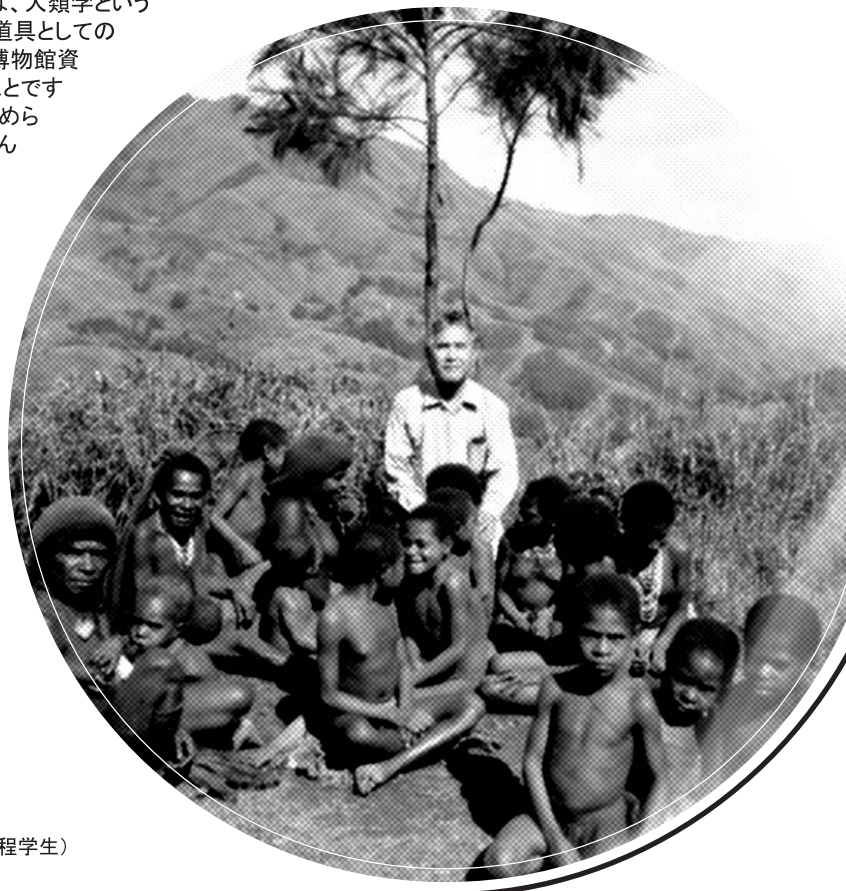
資料写真を見るおもしろさのひとつは、撮影者が意図した対象だけでなく、撮影者が意図しなかった対象の細部にまで目を向けてじっくりと観察し、自分なりの発見を楽しむことだと思います。

この作品では、それぞれの資料写真に映り込んでいる様々な細部を拡大して映し出すことにより、一枚一枚の写真を顕微鏡で見るような新鮮な感覚を喚起させ、展示と映像との往復を促すことで、鑑賞者がそれぞれの鑑賞の楽しみを発見できるようにと編集を試みました。

展示をおえて

今回の展示企画で、私が担当したのはおもに映像製作でした。その際の方針として、映像作品は展示の主役ではなく、あくまで資料と来館者をつなげる仕掛けであると位置づけ、製作を試みました。今回製作した映像を通して、実物の写真資料により興味を持ったり、沼沢先生のこと、ニューギニアのこと、さらには人類学という学問にとっての写真の役割などに関心を持ってくれる人がひとりでも増えることがひとつの目標だったわけです。

展示が終了した、今、振り返ってみると、こうした企画の実現に協力する過程で、個人的にはとても貴重な経験ができたと考えています。それは、人類学という学問分野、あるいは博物館という場所における、「仕掛け(=道具としての教材)」の重要性を発見できたことです。写真資料に限らず、博物館資料の利用というのは、専門の研究者にとってはとても身近なことですが、一般の人や学生にとって博物館資料は、ケースの中に納められた遠い存在です。それは、学ぶための仕掛けとしてじゅうぶんにデザインされているとは言えない状況にあります。最近では、資料に直接触れることのできる展示というものもありますが、博物館の利用可能性を考えた時、資料の「貴重さ」に触れることよりも、その手前で、もっと身近に、もっと気軽に触る(弄る)ことができ、資料の「おもしろさ」を発見できるような仕掛け=教材が必要なのではないでしょうか。今回は、映像を使ってそのような仕組みを考えましたが、もっといろいろな可能性がまだまだあるように思います。博物館は、理論としての文化資源学を主張する場所であるよりは、きっと様々な道具として利用できる教材を資源として産み出してゆく、学びと創造の場所であった方がよい気がします。今回の展示企画の実現は、そんなことに気づかされる機会でした。



(元南山大学人類学博物館臨時職員・南山大学大学院博士後期課程学生)

**Working on Visuals, Showing Photographs:
Experiments for a Special Exhibition, ‘Memories of the Field’,
at the Anthropological Museum of Nanzan University**

YAMAZAKI Go

‘Memories of the Field’, a photographic exhibition held on the 100th anniversary of the birth of Kiichi Numazawa, an anthropologist, was one of the rare occasions for the Museum to display the materials that would otherwise be kept in a storage room, away from the public. We actually exhibited all the photographs that Numazawa took in New Guinea and left to us, so that viewers could appreciate the size and ethnographic value of this collection. Further, we produced some visual materials to be projected onto a screen, based on selected photographs, in the hope that viewers develop more interest in Numazawa, his research, and New Guinea. By offering such materials/tools of educational value, museums can become more accessible to the public and encourage creative learning.

友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション・データベース化 進捗状況 報告

河邊 真次

はじめに

すでに前号までに報告しているように、2005年3月、南山大学人類学博物館が寄贈を受けた「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」（以下、当コレクション）は、アンデス文化人類学研究の第一人者である友枝啓泰氏（以下、寄贈者）が40年以上にわたるフィールドワークの中で撮影した、4万点を越える写真資料群である。当コレクションを構成する様々な写真媒体に記録されたアンデス地域の諸民族およびその生活・習慣は、視覚的民族資料として一級の学術的価値を有することは言うまでもない。この貴重な画像資料群を所蔵庫に死蔵させることなく、より簡便に利用できるようデジタル化するとともに、視覚的民族資料データベースを構築することが本計画の主目的であり、この目的を果たすべく、2006年度より科学研究費補助金を得てデジタル・データベース化作業はスタートした¹⁾。本年度はその二年目に当たるが、関係各位の協力のもと日々デジタル化作業は継続しており、データも順調に蓄積してきている。

他方、当コレクションは人類学博物館が所有する画像資料ではあるが、その学術的価値を鑑みれば、より多くの利用者を対象とした運用を検討する必要があるろうし、またその前段として当コレクションの存在を広く周知し、研究者のみならず一般の関心

を喚起する必要もあろう。換言すれば、インターネットなどの広域ネットワークを介して画像資料を公開し、希望者に対して参照しやすくする仕掛け作りをすることは、人類学博物館の重要な社会的役割の一つであると考えるのである。

このような問題意識に基づき、2007年度は当初計画に沿ったデジタル・データベース化作業と並行して、当コレクションの広報活動およびWeb上でのデータの一般公開に向けた活動を実施してきた。本稿では、本年度のデータベース化作業の進捗状況と当コレクションの周知に関する諸活動について報告するものである。

1. 友枝コレクションのデジタル・データベース化作業の進捗状況

(1) 2006年度作業実績

2005年度に実施した友枝コレクションの全体概要調査²⁾を経て、2006年度より具体的なデジタル・データベース化作業を開始した。本計画は、4万点以上の総資料点数を5ヵ年でデジタル化するものであるため、2006年度分としてコレクション全体のおよそ20%に相当する8,000点のデジタル画像データベースを完成させることを数値目標とした。また、前号でも示したように、データベース化作業方針の柱として、①各画像資料の書誌データの作成、②画像資料のデジタル化、そして③作成した

デジタル・データの Web 上での公開の三点を置き、一年間にわたり計画を推進した [河邊 2007 : 32]。その結果、①および②に関しては、劣化の著しい 6cm × 6cm ブローニーフィルム約 600 点を含む 8,000 点の画像資料のデジタル化が完了したのである。

しかしながら、デジタル・データの Web 上での公開（上記③）に関しては 2006 年度中に達成することができなかった。前号でも触れたように、画像資料の一般公開には人類学博物館のみならず本学の情報システム全体との兼ね合いを見据えたシステムデザインおよび公開方針の策定が必要である。またその際には、画像資料の肖像権等の諸権利問題、知的資産の扱いに関する法制度面、さらにはデータ管理や運用基準策定などの技術上の諸問題に対する綿密な検討が不可欠である [ibid. : 34]。そのため、後述するように、具体的な Web 上でのデータ公開に関しては本年度より着手することとしたのである。

(2) 2007 年度作業計画と進捗状況

本年度は、2006 年度に引き続き、8,000 点の画像資料をデジタル化する計画を立て、作業を推進してきている。デジタル化作業の具体的な手順及び方針は昨年度と同様として作業を継続し³⁾、作業時間と作業人員の確保に苦慮しつつも、本稿執筆中の 2008 年 1 月 10 日時点で約 4,800 点（本年度計画値の約 60%）を完成させるに至っている。なお、前号でも示したように、デジタル化の優先順位は、コレクションの中で特に褪色や劣化が著しい古い画像資料を優先する方向で進めているが、本年度はここまで、効率的な作業推進のため 35mm

マウントスライドを中心にデジタル化を推進している。その結果、昨年度と併せて、表 - 1 のとおり年代別画像資料のデジタル化が完了している。

ところで、友枝コレクション寄贈当初より、画像資料そのものの経年劣化が大きな懸案となっていた。当コレクションは、一人の卓越した人類学研究者による継続的かつ広範な被写体を撮影した貴重な画像資料群である一方で、古いものでは撮影後実に 40 年以上の時間が経過しているために、一部資料には深刻な褪色やカビの発生が認められる。それゆえ、これら膨大な資料をできる限り現状のまま保存するための方策の一つとしてデジタル化を実施することが本計画の主目的であるが、これと並行して、オリジナルの画像資料群の劣化を極力抑え、より良好な状態で保存する必要に迫られてきている。

とりわけ、1960 年代の画像資料群は、大気中の湿気によるカビの発生に加え、フィルムそのものの素材上の問題点から、強烈な酢酸臭が生じていた⁴⁾。寄贈を受けた時点で、画像資料を収めたいくつかのスライドファイルには劣化対策用の乾燥剤が封入されていたが、原資料のより良好な保存環境確保のため、本年度は湿気や酢酸をより効果的に吸着する新たな吸湿剤を別途購入し、各スライドファイル内に配置した⁵⁾。これにより、気温や湿気が高い梅雨時や夏季に特に発生しがちだった酢酸臭を相当軽減することができ、画像資料群の保存環境改善の一助になったと考える。また同時に、数多くの視覚的民族資料を所蔵する人類学博物館に対して、このような資料保存方法に関する提案も行っており、所蔵

品管理に関わる連携を実施している。

以上、2007年度の友枝コレクションデジタル・データベース化作業の進捗状況について簡潔に報告してきたが、本年度はこうした通常作業に加え、友枝コレクションを国内外に周知するための広報活動をいくつか実施してきた。次節において、これら広報活動の実績を概説してみたい。

2. 友枝コレクションに関する広報活動実績

(1) 人類学博物館 HP でのデジタル画像の公開

すでに述べたように、本計画では Web 上でのデータベース公開を作業の柱の一つに据えている。前号でも報じたが、当コレクションの寄贈を受けた時点からすでに、我々はその存在と学術的価値を関係機関に広く通知してきた。その結果、国内外を問わず各方面から当コレクションに関する問い合わせを受けており、その反響の大きさには目をみはるものがある⁶⁾。

現在推進中のデータベース化作業は、基本的には人類学博物館内部における画像資料の運用、並びに同博物館が所蔵する他地域の画像資料群との対照を可能とする画像資料アーカイブズの将来的な構築を視野に入れて進めている。その一方で、研究者を含め、アンデスに関心を持つより多くの人々が利用可能なデータベース構築あるいはシステム展開もまた、本学人類学博物館に課された重要な社会的使命であると考えられる。またそうであれば、インターネットを利用したデータ公開は、希望者が当コレクションの画像資料群を参照しやすくなるのみならず、博物館資料の展示方法の新たな

道を切り開く試みにもなるだろう。

このような認識から、2007年8月21日より、本学人類学博物館 HP 上の「館蔵品ギャラリー」に、デジタル化が完了した当コレクション中の任意の画像 30 点を抽出し、一般公開を開始した [http://www.nanzan-u.ac.jp/MUSEUM/gallery/index.html]。展示画像の詳細に関しては、添付表-2 および図版 01-02 を参照いただきたい。なお、データ公開に際しては、次の二点に留意した。

- ① Web 上での運用を容易にするために、軽量化した画像を新規に準備する⁷⁾。
- ② 海外からのアクセスを考慮し、当コレクションの概要及び各画像資料の書誌データには英語による表記を付す。

さらに、データ公開開始後、この「館蔵品ギャラリー」に対するアクセス解析も定期的実施することとした。最新のアクセス解析は未入手であるが、公開開始から二ヶ月間に国内外からのアクセス数は 600 件を超え、そのうち一割程度が海外からのアクセスであることが判明している⁸⁾。なお、現在第二回目の画像データ更新に向け、鋭意データ準備に取り組んでおり、本年度末には公開予定である。今後は、公開データを定期的に更新し、ギャラリーの内容をさらに充実させるとともに、将来的には過去に展示した画像データを目的に応じて検索可能な機能を HP に付与し、利用者の容易な運用に資する展示方法を模索していきたいと考えるのである。

(2) 日本ラテンアメリカ学会での友枝コレクション展示

2007年6月2日から二日間、本学において日本ラテンアメリカ学会第28回定期大会が開催された。この大会の中で、当コレクションをより多くのラテンアメリカ研究者に周知すべく、大会期間中、会場の一室（本学B43教室）を使って写真展示を実施した⁹⁾。

展示の方法は次のようなものである。まず、寄贈者の調査の軌跡を追う形で、1960年代から1980年代にかけて撮影された画像資料群の一部をB4サイズに印刷し、特に視覚的民族資料として有効と思われる30点を抽出、同サイズの額縁に入れて教室内に展示した。これと並行して、当コレクションが網羅する地域や民族集団および寄贈者の学術的関心の多様性を紹介する目的で、100枚を超える画像資料をクリアファイルに綴じて閲覧可能とした。なお、展示した画像データの詳細は、添付表-3と表-4、及び図版03-04を参照いただきたい。

この展示会場には、多くの大会参加者が足を運び、また来場者には、会場に立ち会った寄贈者と筆者とが個別に資料の説明を実施したことで、当コレクションの存在と学術的価値をより多くの研究者に認識いただくことができた。特に、来場したアンデス研究者の間からは、実際に当コレクションの個人的な利用可能性の問い合わせをいただいております、データベースの完成とデータ公開に向けた諸準備が急務であることを痛感している。このことを受け、今後は人類学博物館との綿密な協議のもと、当コレクションのデータベース運用基準を早

急に策定する必要があると考えるのである。

おわりに

本稿ではここまで、南山大学人類学博物館所蔵の「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」のデジタル・データベース化計画における2007年度の作業進捗状況と、当コレクションの諸広報活動について報告してきた。本計画着手からおよそ二年が経過した現在、関係各位の協力の元、全体的にみれば概ね当初の計画どおり作業は進捗している。しかしながら、前号で抽出した問題群の中には、依然として解決に至っていない点が存在することも事実である¹⁰⁾。今後も引き続き、人類学博物館並びに関係機関との綿密な連携をとりながら、本計画を進めていきたいと考える。

また、本稿では2007年度の活動報告のみを行っているが、本来であれば当コレクションそのものの研究、あるいは画像資料を用いたさまざまな研究が進められるべきである。残念なことに、今回は具体的な資料研究には着手できていないが、データベース化作業を通じて研究を進めるべき多くのテーマが浮上してきていることも事実である。これらの諸テーマに関しては、今後さらに研究を深め、別稿にて報告していきたい。

註

- 1) 本作業は、平成19年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費、課題番号：No. 188045、代表者：加藤隆浩）に基づいて進められている。なお、本計画は平成18年度より開始され、5

- カ年計画で推進する予定となっている。
- 2) 前号でも報告したように、2005年度の作業に関しては、本学2005年度パッチI-A-1研究奨励金に基づいて実施し、主に35mmスライドの資料点数と大まかな撮影内容を把握することに努めた。なお、その成果は第24号「表-2 友枝コレクション概要」〔加藤・河邊2006:35-54〕を参照いただきたい。
 - 3) 本計画における書誌データ作成及び画像データのデジタル化の作業方針に関しては、前号掲載の拙稿を参照いただきたい〔河邊2007:32〕。
 - 4) 1960年代の画像資料群の多くは、そのフィルムのベースがセルロース・アセテートという素材でできているようである。このベースは、一定期間が経過すると化学変化を起し、フィルムの保存性と平面性に障害を起すことがあるという。この現象はアセテートイオンが湿気と反応して加水分解を起し生じるもので、酢や酢酸のような臭いを伴うことから「ビネガー・シンドローム」と呼ばれる。一度この化学分解が始まると、化学反応は急激に促進されてフィルムの劣化を早めることになる。
 - 5) この新吸湿剤は、従来の吸湿剤では対処できなかった酢酸や亜硫酸を吸着し、フィルムに悪影響を及ぼす有害ガスと湿気を除去するものである。
 - 6) 当コレクションに寄せられる問い合わせの中には、アンデス画像資料の学術的利用を求める個人研究者からのものもあれば、アンデス研究に資する画像資料群のWeb上での相互リンク構築を提案する研究機関からのものもある。
 - 7) 当コレクションのマスターデータは、画質向上並びにデータの可逆性や汎用性を考慮し、非圧縮のRGB-TIFF (Tagged Image File Format) 形式で作成しているため、画像当たりのデータ容量が約20MBと極めて大きなものとなっている。したがって、HP上の画像資料はすべて、容量の小さな運用データ (JPEG形式) を使用している〔cf. 河邊2007:33-34〕。
 - 8) 解析値における海外からのアクセス数は、訪問者のドメイン名から割り出したものである。したがって、ドメイン名から判別できない「アクセス元不明」の訪問者数 (全体の約1/3) の中にも、海外からの訪問者が存在すると推測できる。
 - 9) この試みは、日本ラテンアメリカ学会の承認の下に実施したもので、同大会プログラムにも明記されている。
 - 10) 未解決の問題としては、人類学博物館との整合性をもたせるための分類番号の付与に関する基準策定の問題や、Web上でのデータ公開における画像資料の肖像権の問題などが残っている。

参考文献

- 加藤隆浩/河邊真次 2006 「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」『南山大学人類学博物館紀要』第24号、pp.31-55
- 河邊真次 2007 「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション・データベース化の意義

と学術的利用の可能性—アンデス民衆芸術
「サルワの板絵」のモチーフとの比較研究
を手がかりとして—『南山大学人類学博

物館紀要』第 25 号、pp. 29-53

(友枝コレクション調査班)

表-1 スライドファイルのデジタル化進捗率

撮影年	資料種別	モノクロ/カラー	ファイル冊数	完了冊数	達成率 (%)
1963	ポジスライド	カラー	7	0	0.0
1969	ポジスライド	カラー	9	7	77.8
1973	ポジスライド	カラー	12	10	83.3
1974	ポジスライド	カラー	2	2	100.0
1975	ポジスライド	カラー	8	8	100.0
1979	ポジスライド	カラー	19	7	36.8
1981	ポジスライド	カラー	17	13	76.5
1983	ポジスライド	カラー	17	2	11.8
1985	ポジスライド	カラー	8	8	100.0
1986	ポジスライド	カラー	5	0	0.0
1987	ポジスライド	カラー	13	0	0.0
1988	ポジスライド	カラー	6	0	0.0
1989	ポジスライド	カラー	2	0	0.0
1990	ポジスライド	カラー	1	0	0.0
1991	ポジスライド	カラー	2	0	0.0
1992	ポジスライド	カラー	3	0	0.0
1993	ポジスライド	カラー	2	0	0.0
1994	ポジスライド	カラー	8	0	0.0
1995	ポジスライド	カラー	16	0	0.0
1996	ポジスライド	カラー	3	0	0.0
1997	ポジスライド	カラー	12	0	0.0
1998	ポジスライド	カラー	13	0	0.0
1999	ポジスライド	カラー	5	0	0.0
2000	ポジスライド	カラー	7	0	0.0
2001	ポジスライド	カラー	11	0	0.0
2002	ポジスライド	カラー	6	0	0.0
2003	ポジスライド	カラー	6	0	0.0
(小計)			220	57	25.9

(参考資料：加藤・河邊 2006：35-54)

(注) 調査時点 (2008年1月10日) で作業中のスライドファイルは含んでいない。

また、本表にはブローニーフィルムのデジタル化結果は含まれない。

表-2 南山大学人類学博物館ホームページ「館蔵品ギャラリー」における画像展示内容

資料No.	資料媒体	撮影時期	撮影場所	画像タイトル（撮影内容）
1964-01-075	6×6ブローニー、ネガフィルム	1964-1965年	アヤクチョ県ワマンガ付近	家畜市の開始前の十字架への祈願
1964-01-077	6×6ブローニー、ネガフィルム	1964年6月	アヤクチョ県サン・フアン・ルカナス	サン・フアンの祭典のネグリート踊り
1964-01-101	6×6ブローニー、ネガフィルム	1964-1965年	アヤクチョ県ワマンガ付近	家畜市
1964-02-021	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965年	アヤクチョ県ソコス	サン・クリストバルの祭典の聖行列
1964-02-074	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965年	アヤクチョ県ワマンガ	アヤクチョ市内の町はずれの風景
1964-03-016	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965年	アヤクチョ県ソコス	プルシオ：カーニバルで行われる村対抗レスリング
1964-04-102	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965年8月	アヤクチョ県ソコス	家の新築
1964-04-107	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965年8月	アヤクチョ県ソコス	瓦焼き工程：天日干し
63001-01	6×6ブローニー、ポジフィルム	1965年8-9月	アヤクチョ県ソコス	機織り
63001-72	6×6ブローニー、ポジフィルム	1965年8-9月	アヤクチョ県ソコス	牛犁：ユンタ
69031-07	マウントスライド	1969年	ウカヤリ県プカルバ	船着場でのバナナの船降ろし
69031-08	マウントスライド	1969年	ウカヤリ県プカルバ	船着場でのバナナの船降ろし
73002-34	マウントスライド	1973年8-9月	アプリマック県アンタババンバ	アドベ煉瓦づくり
73025-13	マウントスライド	1973年8-9月	ウルバンバ川沿い	船着場
73030-32	マウントスライド	1973年8-9月	ウカヤリ県セパワ、ピーロの村	オセロットの皮干し
79007-25	マウントスライド	1979年8-9月	アプリマック県カライバンバ～チャルワンカ	ユーカリとマゲイの生える農村風景
79009-32	マウントスライド	1979年7-8月	アプリマック県パンパマルカ	プナ帯でのアルパカ放牧
81005-27	マウントスライド	1981年6月11日	クスコ県ティボン	トウモロコシの天日干し
81008-28	マウントスライド	1981年6月15日	アプリマック県コタババンバ	踏み鋤：チャキタクリヤ
81010-12	マウントスライド	1981年6月16日	アプリマック県コタババンバ	チューニョづくり
81014-20	マウントスライド	1981年6月22日	アプリマック県アンタババンバ	囲い場に仕つらえた山の神（アプ）への供物
81020-36	マウントスライド	1981年7月2日	アプリマック県カライバンバ	リヤマ・キャラバン
81023-10	マウントスライド	1981年7月2日	アプリマック県カライバンバ	アンデネス：階段畑
81028-28	マウントスライド	1981年7月10日	アプリマック県カライバンバ～チャルワンカ	リヤマ・キャラバン
81031-31	マウントスライド	1981年7月19日	アプリマック県アンダワイラス市	常設市
81032-33	マウントスライド	1981年7月25日	アプリマック県パンパマルカ	サンティアゴとサン・ペドロの聖行列
81037-29	マウントスライド	1981年7月26日	アプリマック県ヤナカ	コンドル・ラチ
81038-29	マウントスライド	1981年7月26日	アプリマック県ヤナカ	コンドル・ラチ
81080-31	マウントスライド	1981年	クスコ県チンチェロ	定期市（日曜日）
98020-31	マウントスライド	1998年8月17日	アヤクチョ県プキオ	村の境界に立つ十字架

（出典：http://www.nanzan-u.ac.jp/MUSEUM/gallery/）

表-3 日本ラテンアメリカ学会 2007 年度定期大会 展示内容①

【額入れ展示】

資料 No.	資料媒体	撮影時期	撮影場所	撮影内容
1964-01-002	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	楽隊
1964-01-092	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	家屋の前で角笛を吹く先住民族の男たち
1964-02-001	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	バラヨック：権威の杖を持つ先住民男性
1964-02-021	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	サン・クリストバルの祭典の聖行列 (*)
1964-02-051	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	トウモロコシの穂の束を持って行列をなす先住民女性たち
1964-02-088	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	ティンヤ (太鼓) をたたきながら通りを歩く先住民男性
1964-03-016	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	プルシオ：カーニバルで行われる村対抗レスリング (*)
1964-04-008	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	イグレシア：屋根に乗せる土器の飾り
1964-04-102	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年 8 月	アヤクチョ県ソコス	家の新築 (*)
1964-04-107	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年 8 月	アヤクチョ県ソコス	瓦焼き工程：天日干し (*)
1964-05-021	6×6ブローニー、ネガフィルム	1965 年	アヤクチョ県ソコス	wawa pampay：幼児の葬送儀礼
63001-10	6×6ブローニー、ポジフィルム	1965 年 8-9 月	アヤクチョ県ソコス	娘の頭の虱を取る先住民女性
63001-54	6×6ブローニー、ポジフィルム	1965 年 8-9 月	アヤクチョ県ソコス	組紐づくり
69006-05	マウントスライド	1969 年	グアビアレ川流域	家屋内でユカイもの皮を剥く先住民女性
69031-08	マウントスライド	1969 年	ウカヤリ県プカルパ	船着場でのバナナの船降ろし (*)
73002-34	マウントスライド	1973 年 8-9 月	アプリマック県アンタバンバ	アドベ煉瓦づくり (*)
73015-18	マウントスライド	1973 年 8-9 月	クスコ県クスコ市	定期市でトウモロコシや野菜を売る先住民女性たち
73020-26	マウントスライド	1973 年 8-9 月	クスコ県クスコ市	店先で薬の玉 (団子) を作る男性
73031-32	マウントスライド	1973 年 8-9 月	ウカヤリ県セバワ	ビーロ人の土器作り (屋外での乾燥工程)
74009-35	マウントスライド	1973 年 7 月 27-31 日	(場所不明)	シャボノ (円形長屋) 内でくつろぐヤノマモの少女たち
75004-11	マウントスライド	1975 年 8 月 16 日	アンカシュ県ワラス	布を織る牧民男性
75014-04	マウントスライド	1975 年 9 月 26 日	アンカシュ県ヤクパンバ	馬を連れた牧民の青年
81001-19	マウントスライド	1981 年 6 月 5-9 日	クスコ県クスコ市	クスコの市街地景観
81005-21	マウントスライド	1981 年 6 月 11-12 日	クスコ県ティボン	キノアの実を収穫する農民男性
81005-23	マウントスライド	1981 年 6 月 11-12 日	クスコ県ティボン	山積みされた色とりどりのトウモロコシ
81010-02	マウントスライド	1981 年 6 月 16 日	アプリマック県クタバンバス	チューニョ作り：イモを踏む農民
81022-18	マウントスライド	1981 年 7 月 2 日	アプリマック県カライバンバ	リヤマのキャラバン：リヤマの背に荷を積む牧民男性
81023-10	マウントスライド	1981 年 7 月 2 日	アプリマック県カライバンバ	アンデネス：階段畑 (*)
81032-33	マウントスライド	1981 年 7 月 25 日	アプリマック県パンパマルカ	サンティアゴとサン・ペドロの聖行列 (*)
81037-29	マウントスライド	1981 年 7 月 26 日	アプリマック県ヤナカ	コンドル・ラチ (*)

(**) はホームページで公開中の「館藏品ギャラリー」と重複

表-4 日本ラテンアメリカ学会 2007 年度定期大会 展示内容②

【クリアファイルによる閲覧】

撮影時期	フィルム種別	撮影場所他	展示枚数	撮影時の調査項目
1964.4-1966.4	6×6ブローニー、ネガフィルム	アヤクチョ県ワマンガ郡ソコス村ほか	28	ペルー・アヤクチョ地方での原住民社会の社会人類学的調査
1964.4-1966.4	6×6ブローニー、ポジフィルム	アヤクチョ県ワマンガ郡ソコス村ほか	9	ペルー・アヤクチョ地方での原住民社会の社会人類学的調査
1964.4-1966.4	マウントスライド	アヤクチョ県ワマンガ郡ソコス村ほか	2	ペルー・アヤクチョ地方での原住民社会の社会人類学的調査
1969.2-3	マウントスライド	コロンビア、ベネズエラ、ブラジル、パラグアイ、ペルー	10	大阪万博民族資料収集の旅
1973.5-9	マウントスライド	ペルー南部高地、上流アマゾン	14	南米アマゾンの医学調査（代表：東北大学医学部）
1974.6-9	マウントスライド	コロンビア、ベネズエラ、ペルー、上流アマゾン	9	共同通信社：奥アマゾン探検
1975.6-11	マウントスライド	ペルー北部高地、上流アマゾン	9	科研：核アメリカ学術調査（代表：寺田和夫）
1981.4-12	マウントスライド	ペルー、ボリビア	29	科研：中央アンデス農牧社会の民族学的研究：垂直統御と環境利用（代表：増田昭三）

Progress Report: Digitization of the Tomoeda Collection of Andean Photographs

KAWABE Shinji

The collection of Andean photographs that Hiroyasu Tomoeda has donated to the Anthropological Museum of Nanzan University is in the process of conversion into a digital database. It is expected that approximately two fifths of the 40,000 photographs will have been digitized by the end of the 2007 academic year. In conjunction with this effort, we are preparing for online publication of the database by initially making 30 photographs available for viewing on the Museum website. Furthermore, we held an exhibition of selected photographs at the 2007 annual conference of the Japanese Association for Latin American Studies, which was well received by many researchers. The Tomoeda collection has thus attracted the attention of academics from Japan and beyond, pointing to the urgency of completing the database and of making provisions for its online operation.



1964-01-075



1964-01-077



1964-01-101



1964-02-021



1964-02-074



1964-03-016



1964-04-102



1964-04-107



63001-01



63001-72



69031-07



69031-08



73002-34



73025-13



73030-32

南山大学人類学博物館ホームページ「館蔵品ギャラリー」における展示画像①



79007-25



79009-32



81005-27



81008-28



81010-12



81014-20



81020-36



81023-10



81028-28



81031-31



81032-33



81037-29



81038-29



81080-31



98020-31

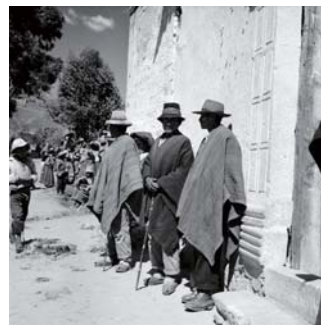
南山大学人類学博物館ホームページ「館藏品ギャラリー」における展示画像②



1964-01-002



1964-01-092



1964-02-001



1964-02-051



1964-02-088



1964-04-008



1964-03-016



1964-05-021



63001-10



63001-54

日本ラテンアメリカ学会 2007 年度定期大会 展示画像①



69006-05



73015-18



73020-26



73031-32



74009-35



75004-11



75014-04



81001-19



81005-21



81005-23



81010-02



81022-18

日本ラテンアメリカ学会 2007 年度定期大会 展示画像②

※上記画像資料には、人類学博物館 HP に公開中の画像資料群（図版 01 および 02）と重複するものは除いている。

また、大会期間中クリアファイルに綴じて展示した画像に関しては、紙幅の関係上掲載を見合わせた。

平成 20 年 3 月 15 日 印刷

平成 20 年 3 月 21 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 26 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

TEL 052(832)3111 (代表)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町 19-20

TEL 052(871)9190